

令和6年度 第2回さいたま市民大学運営委員会 議事録

1 開催日時

令和6年10月15日（火） 午後2時から午後3時30分まで

2 開催場所

生涯学習総合センター 10階 多目的ホール

3 出席者

〈委員：9名〉

- ① 神保 富美子 委員長
- ② 山中 冴子 副委員長
- ③ 青木 光美 委員
- ④ 浅野 永子 委員
- ⑤ 加藤 恒 委員
- ⑥ 関根 公一 委員
- ⑦ 関根 広美 委員
- ⑧ 中川 敬三 委員
- ⑨ 羽諸 英臣 委員

〈事務局：8名〉

生涯学習総合センター

- ① 館長 岸 聖一
- ② 参事兼副館長 井出 浩史
- ③ 主幹兼事業・企画係長 山田 浩行
- ④ 事業・企画係主査 蜂谷 香織
- ⑤ 事業・企画係主査 曾根 啓佑
- ⑥ 事業・企画係主事 小暮 裕貴
- ⑦ 社会教育指導員 渡邊 京子
- ⑧ 社会教育指導員 永井 紀美子

4 欠席者名

〈委員：3名〉

- ① 川又 伸彦 委員
- ② 桑原 静 委員
- ③ 平田 利雄 委員

5 報告事項

(1) 前回の議事録について

6 協議事項

(1) 令和7年度さいたま市民大学各コース（案）について

7 その他

(1) 運営委員会等のスケジュールについて（予定）

8 公開・非公開の別

公開

9 傍聴者の数

0名

10 報告内容

(1) 前回の議事録について、事務局から説明。

11 協議内容

(1) 令和7年度さいたま市民大学各コース（案）について協議。

事務局より、教養Ⅰ・Ⅱ、さいたまの魅力Ⅰ・Ⅱ、大人の社会科見学、メディカル、市民企画、地域ボランティア養成、生成 AI、IT スキル、プログラミング、パソコンの各コースについて説明をした。

以下、質疑等の内容

【教養Ⅰ・Ⅱコース】

山中副委員長	教養Ⅰの「臨床心理学の扉を開く」というのは、「臨床心理学」という学問を学ぶのか、それとも「生活に寄り添った心理学」を学ぶのか、どちらの内容なのかタイトルからイメージするのが難しい。受講希望者のイメージやニーズと、講座の内容展開にズレが生じないようにした方がいい。
事務局	臨床心理学に興味を持たれている方をターゲットに学びのきっかけを作るという観点で、講座内容を検討していく。
中川委員	教養Ⅱについて、まちづくりに興味を持っている一般市民は少なく、受講生が集まりにくいのではないかと。「まち」に住む、一個人としてどうあるべきか、さいたま市がどのような「まちづくり」をしているのか、一市民として実感できるテーマにすべきなのではないかと。内容がそうなっているのならばよいが、概要の表現は漠然としている。 一般市民向けの講座である以上、学習を提供する側が学んでもらいたいと思う内容ではなく、市民が聞きたい・勉強したいと思う内容にしないと集客が難し

	い。現在のテーマ・内容の表記は、表現も含め再度検討すべきではないか。
事務局	市民大学として、市民ニーズだけでなく社会的な課題にもスポットを当てた講座を設けるという考えから、令和7年度は教養Ⅱでこのような内容を提案した。現在の概要・内容の表記は大枠を示したものであり、表現が曖昧となっている点も含めてこれから検討を進め、より市民の方が学びたいと思える内容にしていく。
青木委員	市民大学が提供する学びと人々の生活課題とを具体的につなげられるといい。教養Ⅰであれば、例えばメンタルヘルス、健康経営、ストレスチェックの義務化、といった身近な、聞いたことのあるワードがあると、興味関心が高まると思う。身近なワードを学びとのつなぎ目の仕掛けとしてうまく取り入れていくと、「学び」と「生活課題」の両立が見えてくると思う。 教養Ⅱも、例えば災害リスクを踏まえたまちづくりであれば「ハザードマップの見方」といったパワーワードがあると興味の沸き方が違う。それを専門家から学べるのなら深い学びが得られるのではという期待感も持てる。ハザードマップについては埼玉大学の教授の研究がニュースにもなっていた。さいたま市にそのような専門家がいらっしゃるのでは何かご協力を仰げないか。
事務局	市民の方々の身近な生活につながるような学びを組み込めるよう検討していく。
浅野委員	教養Ⅱについて、「まちづくり」は市の視点からみた大きな言葉であり、「自分が作れるものではない」と思う市民の方もいるのではないかと。既に住んでいるまちをもっと住み続けていきたいまちにするために、市民個人が何をすべきか、どのような情報を取り入れて、どう過ごしていくか、といった内容になると、魅力的な切り口になると思う。
関根広美委員	教養Ⅰ・Ⅱ・その他コースにも言えることだが、平日昼間の開催となっており、39歳以下のみならず仕事をしている人の参加が難しいと思う。 教養Ⅱについては、身近な問題として受け止められると、とても広がりのある課題だと思う。また、受講によって、自分たちでできる、明日からできるというもの、例えば、防災タイムラインを作れるなど、受講することで何が得られるのか具体的に分かったと参加しやすいのではないかと。
事務局	曜日等、より多くの方が受講しやすい仕組みについて改めて検討していく。

【さいたまの魅力Ⅰ・Ⅱコース】

中川委員	盆栽を取り巻く伝統技芸とは何か。盆栽を作る上での技術が説明されるのか、それとも「取り巻く」と書いてあるので盆栽技術以外の文化などを紹介するのか。
事務局	盆栽美術館との調整が必要だが、盆栽づくりの技術だけでなく、盆栽を取り巻く歴史や文化を併せて紹介していきたい。
中川委員	盆栽は非常に人気があり、盆栽の魅力や文化を学ぶだけでなく、実際に盆栽をするうえでの注意・すでに始めている人向けによりよくする方法など、例えば2日のうち1日は盆栽園で講義を受け盆栽の技術を学ぶようにすると人が集まると思う。

加藤委員	実技系については盆栽美術館が主催する講座でも学べると思う。市民大学との差別化を考えたときに、限られた回数の中で技術まで盛り込むよりも、あえて実技ではない部分を掘り下げていくのもいいのではないかな。取り巻く伝統技芸という視点も面白いと思う。
事務局	盆栽美術館と調整をしながら、内容を検討していく。
山中副委員長	「さいたまの魅力」というコース設定について、まずは市民大学としてこの講座で何を伝えていきたいのか軸足を固めるべきだと思う。盆栽村100周年が念頭にあるのであれば、それが伝わるように内容に反映していく必要がある。
神保委員長	そもそも鉄道や盆栽はさいたま市の魅力としてどこまで認知されているのか。概要に本市の魅力ある資源が鉄道や盆栽であるという一文が必要だろう。私の経験だが、都内のある区で地域の魅力として公共施設等を紹介しようとしたところ、区民の60%がその存在を知らなかった、ということがあった。紹介しようとする地域資源がどの程度知られているかによって、講座の告知も変わってくると思う。

【大人の社会科見学コース】

加藤委員	市民大学としての趣旨や意図が企業に伝わるのか。相手方に任せきりだと企業の宣伝になりかねない危うさもあるので、航空機を運航することと環境問題との関係がしっかりと示せるように十分な協議が必要だと思う。
事務局	内容はこれから詰めていくが、単なる企業の宣伝にならないようにということはすべての講座で考慮している。相手方に市民大学のコンセプトや市民に学んでもらいたい内容を伝えながら、環境問題と空の仕事を組み合わせた意義深い学びになるよう講座を構成していく。
中川委員	空の環境問題とは何か。環境保全だけを考えるなら、航空機の利用自体がどうかという考え方もある。 また、大人に限定する理由は何か。子供も大変興味を持つ内容だと思うし、参加の機会を与えてもよいのではないかな。夏休みに子供をターゲットとして開催したほうが集客できるのではないかな。
神保委員長	子供の申込みは可なのかな。大人を対象としたかった理由はあるか。
事務局	遠方での施設見学となるので、安全性確保の観点や、大人が工場見学に行く機会が少ないということを考慮し、本講座では大人をメインターゲットとしている。また、今年度、鉄道博物館で開催したさいたまの魅力コースにおいて、定員の5倍を超える応募があったことから、集客については問題ないと考えている。
中川委員	現地集合・現地解散にすれば、安全性の問題はなくなるのではないかな。
事務局	施設見学を伴う講座では、集合場所での待機や受講生との連絡等、通常の講座以上に人員が必要となる。実際、今年度のさいたまの魅力コースにおいて、当日キャンセルや連絡なくお休みする方・連絡が全く取れない方がおり、人員を割いて対応を行った。そのため、遠方に出向くことになる本講座については、アクシデントのリスクを減らし安全な運営を目指す観点から大人をメインターゲットとした。ただ、“どなたでも”とある通り、子供の参加を排除するものではない。

中川委員	11月の平日だと、子供は参加できない。
事務局	開催日時もターゲット等に合わせて検討したい。
神保委員長	大人がメインターゲットだとしても、土日開催にするなどで親子でも応募できるようなスケジュールにすればニーズに対応できるのではないかな。

【地域ボランティア養成コース】

浅野委員	開催時期が7月の平日となっているが、7月の後半から8、9月までの時期で開催されると、夏休みの大学生の参加が見込めるのではないかな。夏休みに開催することで、若年層の受講者を増やせるのではないかな。
山中委員	「ボランティア養成」というコース名だが、内容的には「養成」ではなくモチベーション向上程度に留まっているように感じる。具体的な活動やスキルまで踏み込むのが養成だと思うので、きっかけづくりや団体紹介に留まるのであれば4回もやらなくていいように思う。演題、概要、内容がかみ合っていないようだがゴールはどのように想定しているかな。
事務局	最終的には公民館で活動しているボランティア団体につなげて、そこで本格的な活動に入ってもらうことを想定している。意見をふまえ、さらにターゲットや内容を練り直していく。

【生成 AI コース】

関根公一委員	生成 AI は全体的に市民の興味関心も高く、また「日常生活にも活用できる」という表記でもあるのに、この講座を39歳以下優先にする必要性・相関性があるのか疑問である。 また、オンライン開催で定員100人は少ないと思うが、100人超にはできないのかな。
事務局	センターが契約している Zoom のアカウントでは、同時接続が100人までなので定員を100人にしている。 39歳以下優先については、若い世代の興味関心がより高いと想定し、平日夜間のオンラインという方法も含めて39歳以下の方を優先することとした。
青木委員	Zoom での講座を開催した経験から考えると、入室管理や質疑応答の対応など、満足度の観点から100人でも多くケアしきれないのではないかなのではないかなと感じる。定員を増やすよりも、夏と冬の2回開催にするなどの対応ができると参加者にもメリットがあると思う。

【IT スキルコース】

青木委員	今年度の Canva 講座で、受講者から自分の端末を使って受講したいという要望はあったかな。 また、定員が20人である理由が PC の台数であれば、自分の PC やタブレットを使って参加したいという方がいた場合に定員は増やせるのかな。大変人気の講座だと思うので、自分の端末を利用してサテライトで受講する方法なども今後検討していただき、少しでも受講枠を増やせたらと思う。
------	---

事務局	Canva はアカウントを取得すれば、後で自分の端末でも使用することができるため、講座で自分の端末を使いたいという要望はなかった。定員については、機材の数だけでなく講師が指導できる人数の上限もあるので、20人という定員は維持したい。
-----	--

【プログラミングコース】

浅野委員	スクラッチでのプログラミングが2回の授業だけでできるのか心配もある。授業中に完了しない場合、自分のパソコンでやって来て、次の回で先生に見ていただくなどの対応も取れるとよいのではないかな。
------	---

青少年宇宙科学館、うらわ美術館、大宮西部図書館、博物館より、科学、美術、文学、歴史の各コースについて説明をした。

【科学コース】

中川委員	全3回の講座を1つ開催、という意味か。
青少年 宇宙科学館	その通り。

【美術コース】

中川委員	全2回の講座を1つ開催、という意味か。
うらわ美術館	その通り。
中川委員	美術鑑賞は一般的に、絵が何をテーマにどういう意味を持って描かれているのかが分からない、という部分で美術館に行くまでの心理的ハードルが高いと思う。そうした内容がワークショップの中で教えてもらえると嬉しいのか。
うらわ美術館	今回のワークショップでは、専門知識を詰め込むのではなく、自分の人生経験を基に作品と対峙して掘り下げていくことを想定している。時代や作家の背景について知りたいということであれば、美術館主催の講座等に参加いただければと思う。
加藤委員	開催時期は、展覧会の時期と重なっているのか。この講座を受講後に展覧会に行って、鑑賞ができる十分な期間はあるか。
うらわ美術館	展覧会は6月までなので、1~2週間重なってはいるが、あまり長い期間ではない。
加藤委員	ワークショップは実際の絵を見ながらの方がいいように思うが、そうならないのは定員が70人と多いからか。
うらわ美術館	70人に一度に鑑賞していただくのはハードルが高い。そもそも市民大学では、美術館に行く前にカジュアルに話が聞きたい、うらわ美術館に行く前に地元の大宮で開催するのなら話を聞いてみようという層がターゲットである。

【全体を通して】

神保委員長	全体的に平日日中の開催が多いが、39歳以下の方をはじめ働いている人は参
-------	-------------------------------------

	加が難しいのではないか。
事務局	事務局の人員確保や勤務体制なども踏まえた日程案となっている。 これまでの統計では、平日開催と土日開催で集客に大きな差はなく、内容が重視されているように感じている。39歳以下の方の集客については、すべてではなく講座の特性ごとにオンラインや時間帯で取り組んでいきたい。
神保委員長	各コースについて講師の当たりはついているのか。
事務局	コースによって、講師と調整を始めている・講師をリストアップ中などあるが、大体の当たりはつけている。
神保委員長	今後調整をしていく中で、この会議の内容、そして市民ニーズがどのようなものなのかを講師の方に率直にお伝えしていくこと、また募集する際のキャッチコピーに市民が学びたい内容が表れるよう、どのような言葉を作っていくのか次回1月の運営委員会までの課題になると思うので、検討を進めてほしい。

1 2 その他

令和6年度第3回運営委員会について、事務局から案内した。

1 3 閉会